

乳幼児健診に参加した母親の予期不安に影響する要因の検討

－母親へのアンケート調査結果より－

北村（難波）亜希子¹⁾*・小田 慈¹⁾

1) 新見公立大学健康科学部

(2017年11月15日受理)

母親の育児不安要因を明らかにするため2010年4～5月、乳幼児健診に参加した母親2330名に質問紙調査を実施し2041名から回答を得た。回収率は87.6%であった。予期不安・期待感への影響要因は、「母親の年齢」「初・経産婦」「子どもの月齢」「不妊治療」「喫煙」、乳児の刺激敏感は、「初・経産婦」「子どもの月齢」「子どもの栄養」「世帯収入」であった。

育児不安の平均値が高かった9～11ヶ月健診では医療者は初産婦への子どもの成長・発達へのサポート内容や量、手段について更なる検討を行い、改善をはかる必要があることが示唆された。また、この時期には夫や家族からのより一層の育児支援の必要性が示唆された。

キーワード：母親、乳幼児健診、質問紙調査

1. 緒言

近年、結婚年齢の上昇、出産年齢の上昇、少子化、核家族の増加、地域の繋がり希薄化など母親をとりまく日本の育児環境は少しずつ変化している。ストレスが蓄積しやすい孤立化した状況の中で育児を行っている母親は増加し、育児不安が助長されている¹⁾。全国調査から産後にメンタルヘルスに問題がある母親は乳児の要求に適切に対応することができないなど母子関係に障害を来すことが報告されている²⁾。母親のパーソナリティと育児不安との関係について、自分の内面に注目する傾向の高いこと、心配性の傾向が育児不安に影響していることまた、自分の内面に対して注目する傾向の高い母親は「かんしゃく」や「人見知り」「激しく泣く」など刺激に対する過敏性が高い気質の特徴をもっている乳幼児を育てている場合に育児不安が高い³⁾。しかし、母親自身に対して注目する傾向が低い母親の場合には、育児不安との間に相関がみられないことが報告³⁾されている。敏感な子どもをもつ母親は、子どもに対する対処不能感が強く、育児不安感も高くなるとしている。そのような子どもを「手のかかる子ども」と認知するか、あるいは「手のかからない子ども」と認知するかによって、育児不安に対する母親の認知的評価が変化することを示唆している。さらに、このような母親は子どもに不快感を表し、好ましくない育児行動をとる場合があり子どもの成長発達に関する長期的予後に悪影響を与えることが報告⁴⁾されている。子育て支援においては母親の育児不安や子育て負担の軽減が重要であり、育児不安をもつ母

親への支援は虐待防止にもつながる。各市町村が育児不安を支援する目的に子育て支援センターや児童館などの設置により育児相談や遊び場の提供、仲間作りなど地域における子育て支援活動が定着しつつあるが、いまだ多くの市町村では乳幼児を抱える母親の育児不安や葛藤を受け止めた育児支援が充分には行っていないとされている⁵⁾。

A県は人口自然減が著しく、H22年6歳未満の子どもがいる共働き世帯数は全国55.5%、A県は40.4%、ひとり親世帯率の全国1.63%、A県は2.28%、平成1歳6か月児健診受診率のH22年全国94.0%、A県は83.6%、H25年全国94.9%、A県は89.2%、3歳児健診の受診率のH22年全国91.3%、A県は79.5%、H25年全国92.9%、A県は85.1%と受診率は低く⁶⁾、平成26年（2014年）A県の乳幼児健康診査受診状況⁶⁾によると乳幼児健康診査の受診率は全国平均を下回る状況にある。平成27年都道府県別の30～34歳女性のA県労働力は72.2%で他県66.9～70.1%、全国68.8%と比較しても高い⁷⁾。このA県では毎年、新聞紙上で県下全域に案内をする1歳6ヶ月までの乳幼児を対象に乳幼児健診（通称「赤ちゃん会」）が開催されている。この健診は1930年から始まり、子どもの心身の発達状況や育児環境を把握し、医療従事者が母親の不安や悩みを聴くことにより育児不安がある母親を早期発見し、育児支援をはかることが重要な役割の1つになっている。育児不安は養育する児の月齢によって異なることも指摘されている⁸⁾ため、生後2ヶ月～1歳6ヶ月と数多くの月齢が参加する乳幼児健診である時期の子どもの特徴が育児不安のリスクがある母親を月齢別に把握でき、月齢別の母親がもつ育児不安のリスク群としてサポート

*連絡先：北村（難波）亜希子 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 岡山県新見市西方1263-2

に活かせると考えた。

以上のことから、乳幼児健診（赤ちゃん会）に参加した母親へのアンケート調査から母親がもつ予期不安・期待感と乳児の刺激敏感に影響する要因を明らかにすることを目的に研究を計画した。

II 研究方法

1. 調査対象

A県の新聞紙上で県下全域に公募した乳幼児健診（赤ちゃん会）に参加した生後2ヶ月～1歳6ヶ月までの乳幼児をもつ初産婦1157名と経産婦884名を対象とした。

2. 調査方法

2010年4月～5月、調査の趣旨を書いた依頼文と共に無記名の自記式調査用紙を事前に乳幼児健診へ参加を希望した対象者に郵送し、同意が得られた母親から健診会場で調査用紙を回収した。

3. 調査内容

初産婦の基本的属性としては、年齢、就業の有無、最終学歴、世帯年収、不妊治療の有無、不妊治療期間、子どもの出生時週数、出生時体重、子どもの栄養などについて質問した。

また、育児不安調査には、興石の「予期不安・期待感」「乳児の刺激敏感」⁹⁾ 尺度の許可を得て使用した。

「予期不安・期待感」尺度は14項目よりなり、「予期不安」8項目と「期待感」6項目から構成されている。「予期不安」は子育てに失敗するのではないか、母親として自信

がもてないという将来への否定的な感情である。「期待感」は妊娠中から育児を心待ちし楽しみにしている状態である。「乳児の刺激敏感」尺度は17項目から構成されている。「乳児の刺激敏感」は育児をする中で刺激（光・音・空腹・排泄・環境）に対する子どもの気質が扱いにくい、適切に対処できないと否定的な感情の高まりである。これらは生後1ヶ月、4ヶ月、8ヶ月、18ヶ月の子どもを対象にした尺度であり、Cronbach's α 係数は0.73～0.84と高い数値を示していた。また、それぞれの回答には「はいその通り」「ややその通り」「はい時々あった」「あまりそうでない」「全くそうでない」の5段階の評定を求め、順に5点から1点までの点数化を行った（表1）。

4. 分析方法

分析ではまず、回答者の属性と育児不安に関する尺度の概要を整理した。また、各質問問の評価で乳児の刺激敏感の③⑤～⑦⑫⑮⑯の質問項目については否定文の文章の結果を逆にすると全部肯定文の場合と同じ結果が得られる反転項目であるので5～1点までの点数を配分した。予期不安・期待感と乳児の刺激敏感に影響する因子の特定には母親の属性を説明変数として重回帰分析を行った。説明変数はすべての質問項目を変数として投入した後に、変数減少法によって選択した。統計処理には統計ソフトSPSS18.0 j for windowsを使用し、推測統計値の有意水準は両側5%未満とした。

【倫理的配慮】

研究対象者には研究目的、方法、参加は自由であり拒否する権利があること、研究目的以外に使用しないこと、個

表1 「予期不安・期待感」と「乳児の刺激敏感」の項目別実態

尺度	因子	項目	n=2041 *反転項目					人数(割合)
			全くそうでない	あまりそうでない	はい時々あった	ややその通り	はいその通り	
予期不安・期待感	予期不安	① 自分で育児をちゃんとやれるかどうか心配だった	223 (11.0)	495 (24.40)	578 (28.50)	409 (20.17)	323 (15.93)	3.06±1.23
		② 自分が育児することに自信がなかった	12 (0.59)	86 (4.24)	235 (11.59)	559 (27.56)	1136 (56.02)	4.34±0.88
		③ 皆もやっていることなので、自分もきちんと子どもを育てていけたと思った	41 (2.03)	254 (12.52)	474 (23.37)	788 (38.86)	471 (23.22)	3.69±1.03
		④ 自分は母親として不適格なのではないだろうかと思った	872 (43.00)	690 (34.02)	359 (17.70)	91 (4.49)	16 (0.79)	1.86±0.92
		⑤ 子育ては、母親として自分が中心になってやらねばならないのだと思い、心の負担になった	520 (25.64)	788 (38.86)	476 (23.47)	191 (9.42)	53 (2.61)	2.25±1.02
		⑥ どこかで育児に失敗するのではないかと不安を感じた	22 (1.09)	138 (6.80)	300 (14.79)	707 (34.86)	861 (42.46)	4.11±0.96
		⑦ 子どもは無条件に愛せるし、子どもも当然自分になついてくれるはずだった	36 (1.78)	155 (7.64)	316 (15.58)	724 (35.70)	797 (39.30)	4.03±1.01
		⑧ 子どもと一緒になら、どんなことにも耐えていけたと思っていた	810 (39.94)	495 (24.40)	215 (10.60)	213 (10.51)	295 (14.55)	2.35±1.45
		⑨ 子どもと共に居る自分の将来が大変楽しみである、と思っていた	7 (0.35)	53 (2.61)	194 (9.57)	553 (27.27)	1221 (60.20)	4.44±0.80
		⑩ 赤ちゃんがおなかの中で動いている(胎動)と感じた時、喜びを感じた	2 (0.10)	15 (0.74)	81 (3.99)	190 (9.37)	1740 (85.80)	4.80±0.54
		⑪ 本当に子どもがとても欲しかった	19 (0.93)	80 (3.94)	206 (10.16)	369 (18.20)	1354 (66.77)	4.46±0.89
		⑫ 育児は有意義な仕事だと思っていた	47 (2.32)	243 (11.98)	309 (15.24)	653 (32.20)	776 (38.26)	3.92±1.10
		⑬ 育児をしている母親は、たくましく、輝いて見えた	27 (1.34)	198 (9.76)	448 (22.09)	666 (32.84)	689 (33.97)	3.88±1.09
		⑭ 早く育児をしたいと思った	97 (4.78)	319 (15.73)	437 (21.55)	497 (24.51)	678 (33.43)	3.66±1.22
乳児の刺激敏感	乳児の刺激敏感	① 私の子はちょっとした物音や光(フラッシュなど)に敏感だ	392 (13.33)	672 (33.14)	499 (24.60)	322 (15.88)	143 (13.05)	2.58±1.17
		② 私の子は目覚めていることが多く、よく泣く	475 (23.42)	959 (47.29)	381 (18.79)	153 (7.54)	60 (2.96)	2.19±0.98
		③ *私の子は授乳後はぐっすり2～3時間眠ってしまふ	200 (9.86)	578 (28.50)	563 (27.76)	423 (20.86)	264 (13.02)	2.99±1.19
		④ 私の子はお風呂に入る時、よく泣く	1242 (61.24)	499 (24.65)	196 (9.68)	56 (2.76)	35 (1.67)	1.59±0.90
		⑤ *おふろの中では泣いたりせず、じっとおとなしくしている	100 (4.94)	307 (15.14)	299(14.74)	631(31.11)	691(34.07)	3.74±1.21
		⑥ *私の子は泣いた時、私がなだめなくても、自分で指をしゃぶったりして自然に泣き止むことがある	460 (22.68)	651 (32.10)	518 (25.54)	268 (13.21)	131 (6.47)	2.49±1.16
		⑦ *わたしの子は、毎日、ほとんど同じ時刻に母乳(ミルク)を欲しがって飲む(1時間以上達わない)	221 (10.90)	611 (30.13)	402 (19.82)	625 (30.81)	169 (8.34)	2.96±1.17
		⑧ 毎回、飲むミルクの量は全く予測できない	376 (18.54)	708 (34.91)	345 (17.01)	316 (15.58)	283 (13.96)	2.71±1.31
		⑨ 私の子は一人きりになると、泣く	110 (5.53)	359 (17.70)	534 (26.33)	535 (26.38)	490 (24.16)	3.46±1.19
		⑩ 私の子は朝目覚めたり夜眠る時刻は、その日によって異なる	249 (12.28)	884 (43.59)	341 (16.81)	372 (18.34)	182 (8.98)	2.68±1.17
		⑪ 目覚めた時や眠りにつく時、泣いたりぐずったりする	123 (10.07)	397 (15.58)	649 (32.00)	603 (29.73)	256 (12.62)	3.23±1.09
		⑫ *オムツがぬれても、ぬれてない時と同じようにしている	150 (7.40)	442 (21.79)	479 (23.62)	592 (29.19)	365 (18.00)	3.29±1.20
		⑬ オムツを換える時、あやしたりしてもぐずり続ける	657 (32.40)	838 (41.32)	384 (18.93)	115 (5.67)	34 (1.68)	2.03±0.94
		⑭ 私の子は、一晩に3回以上目を覚まして泣く	784 (38.66)	451 (22.24)	362 (17.85)	223 (11.00)	208 (10.25)	2.32±1.35
		⑮ *私の子は寝る場所や時刻が変わっても、容易に慣れよく眠る	121 (5.96)	481 (23.72)	484 (23.87)	636 (31.36)	306 (15.09)	3.26±1.15
		⑯ *1日の中で一番活動的になる時刻は、毎日ほぼ同じである	23 (1.14)	202 (9.96)	346 (17.06)	1022 (50.39)	435 (21.45)	3.81±0.92
		⑰ 私の子は眠っていても、ちょっとした物音や光で、すぐに目を覚ます	602 (29.68)	705 (34.76)	451 (22.24)	190 (9.37)	80 (3.95)	2.23±1.09

個人情報保護などについて調査用紙に依頼文を添付した。質問用紙の回答および提出をもって調査に対する同意が得られたとした。なお、本研究は高知大学医学部倫理委員会の承認を得た（19-64）。

III 結果

1、対象者の属性

乳幼児健康診査に参加した2330名の内2125名の母親から回収し（回収率91.2%）欠損値のない2041名（87.5%）を分析対象とした。母親の年齢は17～46歳まで分布し、その平均年齢と標準偏差は31.69±4.63歳であった。初産婦1157名（56.7%）の平均年齢と標準偏差は30.67±4.62歳、経産婦884名（43.3%）の平均年齢と標準偏差は33.01±4.31歳であった。無職は1020名（50.0%）の半数で世帯収入は200～400万円未満921名（45.1%）が最も多く、世帯収入は200万円未満が142名（7.0%）であった。不妊治療で妊娠した母親は168

名（8.2%）で不妊治療期間は3ヶ月から144ヶ月であり、自然妊娠が1873名（91.8%）と9割以上であった。非喫煙者は1906名（93.4%）、喫煙者は135名（6.6%）、であった。子どもの数は1～5名で平均1.56±0.73人、1人が1157人（56.7%）であり、2人が652人（31.9%）であった。子どもの出生時体重は664～4582gで、平均出生時体重3028±410.6g、子どもの出生時週数は27～42週で、平均出生時週数38.81±1.74週であった。子どもの月齢は2～5ヶ月381名（18.7%）、6～8ヶ月487名（23.9%）、9～11ヶ月441名（21.6%）、12～14ヶ月442名（21.6%）、15～18ヶ月290名（14.2%）であった。母乳栄養1214名（59.5%）、混合栄養680名（33.3%）、人工栄養147名（7.2%）であった（表2）。

2、子どもの月齢別の予期不安・期待感と乳児の刺激敏感
子どもの月齢別の予期不安・期待感の平均値は9～11ヶ月の441名（21.6%）は3.74±0.36、6～8ヶ月の487名（23.9%）は3.71±0.36と高く、15ヶ月～18ヶ月の290名（14.2%）は

表2 対象者の属性と期待感・予期不安感と乳児の刺激敏感の平均値 (n=2041)

対象者の属性			期待感・予期不安感 検定値		乳児の刺激敏感 検定値	
母親の年齢（歳）	平均±SD	31.69±4.63				
初産婦の年齢	平均±SD	30.67±4.62				
経産婦の年齢	平均±SD	33.01±4.31				
	範囲	17～46				
初産（名）	初産婦	1157	3.69±0.42	t=12.87*	2.86±0.42	t=11.55*
	経産婦	884	3.52±0.45		2.75±0.43	
就労の有無（名）	有職	1016	3.58±0.29	t=5.66	3.78±0.27	t=4.37
	無職	1020	3.59±0.28		2.81±0.24	
	未回答	5				
不妊治療（名）	有	168	3.68±0.38	t=7.66*	2.74±0.42	t=3.98
	無	1873	3.57±0.38		2.80±0.43	
世帯年収（名）	200万円未満	142	3.67±0.37	F=19.16*	2.89±0.33	F=18.66*
	400万円未満	921	3.60±0.34		2.82±0.39	
	600万円未満	587	3.55±0.38		2.78±0.33	
	800万円未満	267	3.57±0.29		2.78±0.35	
	800万円以上	113	3.63±0.33		2.76±0.38	
	未回答	11				
喫煙の有無（名）	喫煙	135	3.51±0.27	t=2.39	2.77±0.24	t=4.32
	非喫煙	1906	3.59±0.29		2.80±0.28	
子どもの数（名）	平均±SD	1.56±0.73				
	1	1157	3.69±0.42	F=19.66*	2.86±0.42	F=19.99*
	2	652	3.52±0.32		2.75±0.24	
	3	205	3.49±0.24		2.76±0.33	
	4	21	3.57±0.33		2.79±0.28	
	5	6	3.50±0.34		2.78±0.29	
出生時体重（g）	平均±SD	3028±410.6				
	範囲	664～4582				
週数（週）	平均±SD	38.81±1.74				
	範囲	27～42				
子どもの月齢（ヶ月）	平均±SD	9.68±4.09				
	2～5	381	3.58±0.55	F=21.12*	2.81±0.35	F=23.43*
	6～8	487	3.71±0.36		2.91±0.32	
	9～11	441	3.74±0.36		2.96±0.33	
	12～14	442	3.55±0.40		2.79±0.32	
	15～18	290	3.53±0.37		2.68±0.35	
子どもの栄養（名）	母乳栄養	1214	3.58±0.37	F=7.44	2.87±0.33	F=20.17*
	混合栄養	680	3.58±0.36		2.75±0.28	
	人工栄養	147	3.57±0.37		2.72±0.37	

一元配置分散分析多重比較ボンフェローニ *p<0.05 独立サンプルの t 検定 *p<0.05

表3 期待感・予期不安と乳児の刺激敏感に及ぼす影響

	期待感・予期不安感	乳児の刺激敏感
母親の年齢	-0.039* (0.041)	-0.001 (0.717)
初・経産婦	-0.093** (0.000)	-0.086** (0.000)
子どもの月齢	-0.054** (0.007)	-0.084** (0.000)
子どもの栄養	-0.004 (0.823)	-0.090** (0.000)
不妊治療	0.110** (0.000)	-0.016 (0.537)
喫煙	-0.067* (0.047)	-0.012 (0.678)
世帯年収	-0.022 (0.221)	-0.031* (0.049)
R	0.68	0.62
調整済みR2	0.58	0.44

B: 偏回帰係数(有意確率)

3.53±0.37、12～14ヶ月の442名（21.7％）は3.55±0.40、2～5ヶ月の381名（18.7％）は3.58±0.55と低かった。子どもの月齢別乳児の刺激敏感の平均値は9～11ヶ月は2.96±0.33、2～5ヶ月は2.81±0.30、6～8ヶ月は2.91±0.32と高く、15～18ヶ月は2.68±0.35、12～14ヶ月は2.79±0.32、2～5ヶ月は2.81±0.35と低かった（表2）。

3、予期不安・期待感と乳児の刺激敏感に影響する要因

母親の予期不安・期待感と乳児の刺激敏感に影響する因子を検討するため、母親の属性を説明変数として重回帰分析を行った。変数はすべての質問項目を変数として投入した後に、変数減少法によって選択し、予期不安・期待感と乳児の刺激敏感との関連性を調べた。予期不安・期待感に関する項目は、「母親の年齢」 $\beta = -0.039$ ($P=0.041$)、「初・経産婦」 $\beta = -0.093$ ($P=0.000$)、「子どもの月齢」 $\beta = -0.054$ ($P=0.007$)、「不妊治療」 $\beta = 0.110$ ($P=0.000$)、「喫煙」 $\beta = -0.067$ ($P=0.047$) の5因子が抽出できた（表3）。乳児の刺激敏感反応には、「初・経産婦」 $\beta = -0.086$ ($P=0.000$) 「子どもの月齢」 $\beta = -0.084$ ($P=0.000$) 「子どもの栄養」 $\beta = -0.090$ ($P=0.000$) 「世帯収入」 $\beta = -0.031$ ($P=0.049$) の4因子が抽出できた（表3）。

IV. 考察

1、対象者の概要

母親の年齢では初産婦1157名（56.7％）の平均値は30.67±4.62歳、経産婦884名（43.3％）の平均年齢は33.01±4.31歳であり、厚生労働省の人口動態統計月報年計（概数）¹⁰⁾による平成22年度の第1子出産年齢は29.9歳と比較するとほぼ同年齢で構成された集団であった。子どもの数は平均1.56±0.73名であり、国民平均1.39と比較すると本研究対象者の子どもの数はやや多かった。有職者は1016名（49.8％）と約半数が就労していた。厚生労働省は子どもの出産前後における女性の就業状況は約7割が出産を機に離職していると報告¹¹⁾し、仕事と育児を両立することが厳しい現状を示しており、本研究対象者においても同様のことが推察された。世帯収入は200～400万円未満が921名（45.1％）と約半数、200万円未満は142名（7.0％）と少な

かったが、1063名（52.1％）の世帯収入は200～400万円未満であった。妊娠中から育児用品等の準備を行っていても経済的に余裕がないと感じている母親は余裕があると感じている母親よりも育児不安が有意に高い報告^{12) 13)}があり、本研究結果では世帯年収と乳児の刺激敏感に関係があり、先行研究と同様に育児不安が有意に高かった。

2、子どもの月齢予期不安・期待感と乳児の刺激敏感

予期不安・感期待感と乳児の刺激敏感の子どもの月齢別平均値はともに9～11ヶ月、6～8ヶ月が高く、15～18ヶ月12～14ヶ月、2～5ヶ月が低かった。この結果は育児不安を有する母親の割合は産後3ヶ月から6ヶ月になると育児不安は減少するという既存の調査¹⁴⁾結果と一致しなかった。月齢6ヶ月になると乳児は支えなしでお座りができるようになり、目の前にあるおもちゃに手を伸ばしてつかんだり、音を出したり、自分で操作できる事物に関心をもつようになり、人見知りも始まる¹⁵⁾。さらに月齢9ヶ月になると乳児は自分と事物の二項関係に加えて自分と対象物と他者という三項関係での相互作用ができるようになり¹⁶⁾、ハイハイや捕まり立ちもできるようになる。この月齢9ヶ月の発達の変化は乳児と対象物と母親との関わりにおいて重要な時期になる¹⁷⁾ため、時間経過による育児不安の変化は今後詳細に検討する必要がある¹⁴⁾。

「乳幼児健康診査」は「乳幼児健診」と呼ばれ、子どもの栄養状態と成長・発達、先天的な疾患の有無と早期発見、予防接種の種類や時期の確認必要な診査項目をチェックすることを目的としている。無料の定期健診は3～4ヶ月健診、1歳半健診、3歳児健診であり、6～7ヶ月健診や9～10ヶ月健診は任意受診であり、有料の自治体もある。A県A市の乳児一般健康診査は1ヶ月健診から1歳の誕生日の前日までに2回公費で受診することが可能であり、受診票の使用時期の目安は4ヶ月児健診、7ヶ月児健診となる¹⁷⁾。A県の乳幼児健診受診率は全国平均より低く、対象者100人あたりの未受診率は全国値と比べ1歳6か月児健診2.8倍、3歳児健診2.4倍と低く、乳幼児健診の受診機会を確保し、受診を促すことは地域の母子保健水準を保つ上で非常に重要な公共政策上の課題になる⁶⁾。予期不安・期待感と乳児の刺激敏感の平均値が高かった月齢9～11ヶ月、6～8ヶ月の時期は、乳児は座位が安定しハイハイやつかまり立ちができるようになり、自力での行動範囲が広がる一方、人見知り、後追いをするようになり母親が乳児の行動に敏感な反応が増加していることが考えられた。今後は9～10ヶ月児健診で初産婦に子どもの成長・発達へのサポート内容や量、手段についても検討が必要になる。医療者は9～10ヶ月児健診で母親の不安や期待を聴き、夫や家族に伝えていく支援体制を整備する必要がある。

3、期待感・予期不安感と乳児の刺激敏感に影響する要因

予期不安・期待感に影響していた母親の属性は、「母親の年齢」、「初・経産婦」、「子どもの月齢」、「不妊治

療」、「喫煙」であった。乳児の刺激敏感に影響していた母親の属性は、「初・経産婦」、「子どもの月齢」、「子どもの栄養」「世帯収入」であった。

育児に関する初産婦のストレス内容は「子どもの特性」と「育児知識と技術不足」があがり¹⁴⁾、初産婦の母親の中には出産するまで子どもの世話をしたことがなく、初めて子どもに触れるのが自分の子どもであることがあり、育児内容は理解できてもなかなかイメージがつかないということがある。

予期不安・期待感と乳児の刺激敏感に共通して影響していた母親の属性は、「初・経産婦」と「子どもの月齢」であり、子どもの月齢が若く初産婦の母親がまだ育児に慣れていない時期は、子どもの月齢に応じた発達に関する支援が必要となってくると考える。健診において、子どもの発育、発達状態を確認するのではなく、子どもの心と身体の発育を促すために育児に携わっている母親に関する配慮、生活環境が整っているのか、母親の育児不安に対する育児指導だけではなく、その育児不安の背景には子どもの発達の状況が絡んでいないのか等の総合的な視点を持つことが求められると考える。9～10ヶ月に健診を行うことは、1歳に向けての土台となる発育と発達の確認を行うだけでなく、母親に対しての育児支援を行うことにおいても重要な健診であるといえる。

4、研究の限界と課題

本研究は地方の1県にて調査されたため、対象者にやや偏りがある事が予測でき、一般化にあたっては調査地域や対象を拡大して検証が必要である。A県が独自に行っている生後2～1歳6ヶ月であり、赤ちゃん会を主催する新聞社への申し込み書類とともに対象者へアンケート用紙を郵送し、健診会場でアンケート用紙を回収したので返信率が高かった。

V 結語

乳幼児健診に参加した母親へのアンケート調査から母親がもつ予期不安・期待感と乳児の刺激敏感に影響する要因について以下が分かった。

- 1) 母親の予期不安・期待感には「母親の年齢」「初・経産婦」「子どもの月齢」「不妊治療」「喫煙」の5因子の影響が認められた。
- 2) 乳児の刺激敏感には、「初・経産婦」「子どもの月齢」「子どもの栄養」「世帯収入」の4因子の影響が認められた。
- 3) 期待感・予期不安感と乳児の刺激敏感には「初・経産婦」「子どもの月齢」の関連が認められ、月齢9～11ヶ月では不安が高く、15～18ヶ月では低かった。

母親の育児不安を軽減するために9～10ヶ月児健診の初産婦への育児相談等、支援体制を整備する必要性が示唆された。

謝辞：本研究にご協力頂いた協力者の皆様に心よりお礼申し上げます。

(本研究は、平成23年度公益信託高知新聞・高知放送「生命の基金」から研究助成を受けて実施した。)

文献

- 1) 藤岡奈美, 伊藤由香里, 間倉千明, 吉武いづみ. 初産婦の産後1か月における睡眠が産後うつ傾向に及ぼす影響－適応年齢褥婦と高齢褥婦を比較し、高齢褥婦の特性を検証する－. 母性衛生 2016 ; 57 (2) : 385－392.
- 2) 衛藤隆. 幼児健康度に関する縦断的比較研究 平成22年度 総括・分担研究報告書. 幼児健康度調査報告.平成22年度
http://www.jschild.or.jp/book/pdf/2010_kenkochousa.pdf (アクセス:2017. 9.1)
- 3) 厚生労働省. 「健やか親子21」第2回中間評価報告書. 雇用均等・児童家庭局. 2010年.
www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/s0331_13a.html (アクセス:2017. 9. 3)
- 4) 松原直実, 堀田法子, 山口孝子. 育児期の母親の抑うつ状態に関する縦断的研究. 小児保健研究2012. 71 (6) , 800－807.
- 5) 大田康江, 高橋真理. 産褥早期における母親の児への愛着形成を促進する看護者の関わり2016 ; 56 (4) : 618－625.
- 6) 福永一郎. 高知県の乳幼児健康診査受診状況に関する検討. 高知県医師会雑誌 2014 ; 19(1) : 100-111.
- 7) 厚生労働省平成27年国勢調査 世帯構造等基本集計結果
http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/111901/files/2011102700109/27setai_gaiyou.pdf(アクセス:2017. 9.4)
- 8) 厚生労働省 平成24年版厚生労働白書. 東京. 日経印刷株式会社2012 ; 308-325.
- 9) 興石薫. 育児不安の発生機序. 日本小児科学会雑誌 2005 ; 109(3) : 337－345.
- 10) 厚生労働省. 国民生活調査. 平成22年
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL0802101.do?to=GL0802101_&tstat=Code=000001031016&requestSender=dsearch(アクセス:2016. 9.4)
- 11) 厚生労働省. 平成26年版厚生労働白書.
<http://www.hakusho.go.jp/wpdocs/hpax200801/b0055.html> (アクセス2016. 8.23)
- 12) Harumi Bandou, Tetsuko Josima. Related factors in pregnant women who have economic anxiety: From the notification of pregnancy report investigation. 医学と生物学2011 ; 155 (3) : 103-108.
- 13) 山本理絵, 神田直子. 家庭の経済的ゆとり感と育児不

- 安・育児困難との関連. 小児保健研究 2008 ; 67(1) : 63-71.
- 14) 三品浩基, 高石ジョー一郎, 相澤志優, 土田尚. 母親の育児不安と小児救急の関連. 小児保健研究 2011 ; 70(1) : 39-45.
- 15) 高橋靖子, 瀬地山葉矢, 本城秀次, 土田尚. 乳児の気質と母親の育児不安との関連: 妊娠時の愛着表象を防御因子として. 小児保健研究 2014 ; 73(3) : 429-436.
- 16) Corkum L, Moore C. The origins of joint visual attention in infants. *Developmental Psychology* 1998 ; 34 : 28-38.
- 17) Landry H, Garner W, Swank P, et al. Effects of maternal scaffolding during joint toy play with preterm and full-term infants. *Merrill-Palmer Quarterly* 1995 ; 42 : 1177-1199.
- 18) 高知市乳児一般健康診査.
<http://www.city.kochi.kochi.jp/soshiki/148/boshinyuujippannkennkousinnsa28.html> (アクセス2017.1.23)

**An Examination of Factors Causing Mother's with Infants to have Anxiety about Child Rearing
- Based on Survey Results of a Questionnaire given to Mothers who participated in Infant
Healthcare Checkups -**

KITAMURA(NANBA) Akiko, ODA Megumi

Department of Nursing, Faculty of Human Health Sciences, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

A questionnaire survey was given to 2330 mothers who participated in infant healthcare checkups from April to May 2010 to clarify the factors that caused mothers to have anxiety about child rearing. Responses were collected from 2041 mothers; this was a collection rate of 87.6%. The factors that impacted feelings of expectation or anticipatory anxiety were the mother's age, if it was the first child or not, the child's age, infertility treatments, and smoking. The factors that impacted the sensitivity of the infant's response to stimulation were if it was the first child or not, the child's age, nourishment given to the child, and household income.

At the 9 to 11 month health checkups where the average values for child rearing anxiety were high, the healthcare providers conducted a further investigation into the content, means, and amount of support for the growth and development of the child that was provided to first time mothers. The results suggested that it is essential to try to make improvements. Additionally, they also suggested that it is necessary for the husband or family to provide even more support with childrearing during this time period.

Keywords: mothers, infants, questionnaire, anxiety about child rearing